

2024年度 神戸市外国語大学 特別選抜（帰国子女・外国人留学生） 入学試験問題【小論文】

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

言語が違うというのは、現代のグローバル社会では大きな障壁だ。「海外の人々と一緒に仕事をするために、英語を学ぼう」「英語は世界語、英語ができないと現代を生き残ることはできない」というスローガンが叫ばれて久しい。ぼくも大学教員時代は英語を教えていたから、その重要性は自分なりに考えて、納得している部分もある。

この「言語が違うことは障壁だ」という感性は、古代にまでさかのぼれる。旧約聖書のバベルの塔の逸話が有名だろう。旧約聖書によれば、かつて地上にいるすべての人は同じ言葉を話していた時代があったという。その時代、人々は協力して大きな塔を建てようとした。天にまで届くほどのその塔は、どんどんどんどん高くなっていく。その計画が神に対する冒瀆に映ったのだろうか、神は天罰としてバベルの塔を崩し、もう二度とそのようなことができないように、人間の言葉をバラバラにした。それ以来、地上ではたくさんの異なる言語が話されるようになった、ということだ。

バベルの塔が暗に伝えるのは、「言語がバラバラだと困るよね」という思想だ。これを現代風に言い換えるなら、「グローバル規模の大きなプロジェクトを計画して実行するためには英語がないと困るよね」という感じだろうか。

その考えはたしかに否定しがたい。けれど、その考えだけが強調され過ぎると、言語学者としてのぼくは困ってしまう。「たくさんの言語があってぼくらはうれしいし、楽しい」と思って研究をしているのに、世間では「いろんな言語があるのはいいけど、ま、とりあえず英語だよ」という風潮で、反論できないが、納得もできないからだ。英語教育は常に帝国主義的な、「ひとつにまとまった方がいいよね」という価値観を無自覚にはらんでいる。言語学者はその圧力に関して敏感な人が多い。

このバベル的言語観に対して、言語学者のぼくはどのように応答しようか、と考える。すると、聖書に並ぶ聖典が助けてくれる。コーランだ。

コーランも、神様が人間をバラバラにしたと書かれている。しかし、理由が異なるのだ。「君たちがお互いをよく理解するために民族をバラバラにした」というのだ。言語学者として、この言葉にはとても深く納得する。

たとえば、友達と一緒にご飯を食べて、日本語で「おいしい」と言い合っているとしよう。そこでお互いを理解したように感じるけれど、ぼくの「おいしい」と、友達の「おいしい」は、同じ部分もあるだろうが、完全に同じではない。ぼくの感覚は言葉にした途端にその個別性が失われてしまう。しかし、同じ言語を話していると、そのことに気づくことは難しい。

しかし、もし日本語以外の言語を話す人とご飯を食べたらどうだろうか。ぼくが「おいしい」というとき、タイ語で「アロイ」という人がいて、ムラブリ語で「ジョシ」と言う人がいる。「異なる言い方をするってことは、もしかしたら感じていることが違うかもしれない」という発想が、自然と湧いてくるのではないだろうか。味覚を例にしたが、これは感情や価値観、思想でも同じことだ。

ぼくがムラブリ語に惹かれたのも、日本語と違う響きがあったからだ。もしムラブリ語がほとんど日本語と同じような言語で、聞けばすぐに理解できる言語だったら、ぼくはムラブリに興味を持たなかっただろう。日本語とは違う歌うような響きで、それが理解できないから、理解したいと思った。違うから近づきたいと感じたのだ。

2024 年度 神戸市外国語大学
特別選抜（帰国子女・外国人留学生） 入学試験問題【小論文】

言語はバベル的言語観もコーラン的言語観も、同時に内包する。「わたしたちって同じだよ」と、「わたしたちって違うよ」というメタメッセージは、言語を用いるかぎり、常に存在する。どちらかだけが正しいのではない。どちらも本当である。ぼくらは同じだし、ぼくらは違う。それは両立する。

（伊藤雄馬『ムラブリ 文字も唇も持たない狩猟採集民から言語学者が教わったこと』（集英社インターナショナル、2023年） pp. 211-213 より引用）

設問 「バベル的言語観」と「コーラン的言語観」を要約した上で、あなたはどちらの言語観がより説得的だと考えるかについて、理由とともに 800 字以内で論じなさい。（100 点）